

紹介

Kenneth Chase

Firearms: A Global History to 1700.

間野 英 二

グローバル時代の到来に伴って、世界史と呼ぶに相應しい書物が求められて久しい。しかし一人の著者が世界史の流れを明快に敘述するのは容易なことではない。そのためこれまでに眞に世界史と呼びうる業績はアーノルド・トインビーの『歴史の研究』やウィリアム・マクニールの『西歐の興隆』など、ごく少数にしか過ぎなかった。

ここに紹介する書物は、書名に『火器』

一七〇〇年までの「地球史」とあるように、中國で火器が發明された一〇〇年代から、西歐が火器を利用して他地域を壓倒しはじめる一七〇〇年代直前までの世界史を、火器の歴史を中心に描こうとした雄大な試みである。本書に云う火器 (Firearms) とは、著者によれば、「火薬を使用する武器

で、彈丸を筒から發進させるために火薬の爆發力を利用するもの」で、「大砲、小銃、ピストルなどが典型的」という。従って、火薬を使用する他の武器、例えば火箭、火炎放射器、爆彈、地雷などは本書の火器には含まれない。

本書の大筋をあらかじめ示せば、著者はまず「火器は、中國で發明されたのに、なぜ中國ではなく、西歐で發達し完成されたのか」という疑問から出發する。そしてその解答を得るために、主に文獻を用いて世界の諸地域における火器を巡る諸問題を詳細に検討する。そして結論として、火器は遊牧民と關係の深かった中國などの地域では發達せず、遊牧民との關係がほとんどなかった西歐と日本で發達した、つまり西歐で火器が發達したのは、西歐が遊牧民とほとんど關係を持たなかったからだとするユニークな假説を提起している。遊牧民との關係の度合いが、ある地域の火器の發達に大きく影響し、それが結局、世界史の大勢（西歐の優越）を決定したという興味深い理論である。著者の敘述は合理的で説得力に富み、この結論も受け入れやすい。その意味で本書を久方ぶりに登場した、世界史

の名に値する好著として高く評價したい。

多岐に亘る本書の内容を逐一紹介することは、紙幅の關係もあってここでは省略し、以下にその内容をきわめて恣意的に紹介したい。

一 著者 著者のケネス・チェイス氏はアメリカ合衆國の出身で、プリンスストン大學を最優秀の成績 (summa cum laude) で卒業した後、一九九六年にハーヴァード大學大學院の東アジア言語・文明學科から哲學博士號 (Ph.D.) を取得した。博士論文準備中には、日本の京都大學などでも東洋學の研鑽を積んだので、この著者を知る人も少なくないであろう。その後、スタンフォード法科大學院に學んで、二〇〇〇年、法學博士號 (J.D.) を取得し、現在はアメリカの一法律事務所 (Law firm of Cleary, Gottlieb, Steen and Hamilton) の辯護士として、同事務所の香港オフィスに勤務している。著者は中國語、日本語を流暢に話し、フランス語など西歐の言語の他、ペルシア語、テュルク語など西アジアの言語にも通じた文字通りの秀才である。日本では稀な事ながら、辯護士の仕事をしつつ東洋學の研究をも繼續しており、本書はその最

初の成果である。

二 目次 この目次を見れば、本書を世界史と呼ぶに相応しいことが明瞭であろう。

はじめに

一 序論（オイクメネ、ステップ、砂漠、兵站、騎兵、火器）

二 一五〇〇年までの中國（火器の發明、明の勃興、明の軍制、洪武帝の遠征、永樂帝の遠征、ヴェトナム、南海、土木の變）

三 ヨーロッパ（火器の導入、城包圍戰と會戰、地理、大砲と馬、大砲と船、大砲と弓、東歐、アメリカ大陸）

四 西方イスラーム世界（トルコ、オスマン朝の軍制、バルカン、地中海、オスマン朝の成功、エジプト、マムルーク朝の軍制、邊境戰爭、マルジュ・ダービク、マムルーク朝の失敗、マグリブ、サハラ下方のアフリカ）

五 東方イスラーム世界（イラン、サファヴィー朝の軍制、アーザルバイジャン、ホラーサーン、サファヴィー朝は成功か失敗か、インド、アフガン、ムガル、ポルトガル人、東南アジア）

六 一五〇〇年以降の中國（外國の火器、

新式の中國の火器、制度的變革、倭寇、長城、車輻、明の崩壞、ステップの征服）

七 朝鮮と日本（朝鮮、日本、種子島、信長、統一、第一次朝鮮侵略、朝鮮の反應、第二次朝鮮侵略、徳川幕府）

八 結論（一七〇〇年以降の火器、一七〇〇年以降の世界、車輻と槍、火器と遊牧民）

三 執筆の動機 火器を中心に世界史を考へることは、もともと著者の遊牧民（特にモンゴル）に對する關心から生まれた。この執筆の動機を反映して、本書の結論でも、火器の發達と遊牧民との關係についての假説が提示されるのである。

四 着眼點 著者がどのようにして火器と遊牧民の關係に着目するに至ったのか。それは執筆前に、著者の腦裏に次のような二つのアイデアがよぎったためである。

第一の着眼點 中國はなぜ遊牧民であるモンゴルに苦しんだのか。この中國のジレンマについての解答を考える内に、その解答を得るためには、中國同様にモンゴルが

侵攻し支配したロシア、イランなどとこの中國の戰爭のスタイルなどを比較し、そこに見られる類似性および相違性を考える必要があることに氣づく。また、モンゴルの支配の及ばなかったのが西歐と日本であり、この西歐と日本で共通して火器が發達したことにも氣づく。さらに、常に遊牧民と戦い、その對策に苦しんだ地域、例えば中國は遊牧民に對してそれほど火器を使わなかったことにも氣づく。これらの點から、ある地域の遊牧民との關係の度合いと火器の發達の度合いとの間に何らかの相關關係があるのではないかと考えるようになる。

第二の着眼點 フェルナン・ブローデルらの地理に重きを置いた地中海研究などにヒントを得て、遊牧民の活動の舞臺であるステップなどの地理的環境や、それとは異なる西歐や日本、あるいは中國などの地理的環境が、人間の行動、特に戰爭を制約することに着目し、戰爭を問題にする際には、特に地理と關係の深い兵站（食料・軍需品などの供給・補充・輸送）の問題に注意を拂うべきことに氣づく。事實、本書では、兵站の問題に絶えず注意が拂われている。すなわち、人口稠密な西歐や日本では兵站

の問題が少なく、火器を使用する歩兵を安んじて展開できた。それに對し廣大なステップや砂漠では、戦う相手が騎兵であつたばかりでなく、兵站にも問題があつたため歩兵を展開しにくかつた。そのため、例えば中國は、遊牧民との戦いで歩兵よりも火器に適さぬ騎兵を用いた。また火器を用いても、歩兵ではなく車輦を展開した事などがしばしば述べられている。これらの着眼點についての説明を讀むと、學問がいくつかの優れた着眼から出發して大きく進展するものであることをよく理解できる。

五 問題の提起 先述のごとく、「火器は中國で發明されたのに、なぜ中國ではなく西歐で發達し完成されたのか」という問題である。

六 問題の解決方法 中國、ヨーロッパ、トルコ・エジプト（西方イスラーム世界）、イラン・インド（東方イスラーム世界）、朝鮮・日本、それにアメリカ、アフリカ、東南アジアにおける火器の發明・導入・發達などの諸問題を、主に文献を用いて地域別に検討し、歸納的に、先の結論を導き出している。問題の検討に當たつては、中國語、日本語、ペルシア語、テュルク語、ア

ラビア語、それにヨーロッパ諸語による文献（一次文献と二次文献）が博搜され、一次文献はしばしば本文中に英譯して引用されている。また、本書中の各個の記述が、どの文献に基づくものであるかは、卷末の四五ページにわたる詳細な後注に明記され、さらに本書で参照された膨大な文献は、卷末の二七ページに及ぶ文献目録に明示されている。文献の他にも、細密畫や繪卷物などヴィジュアルな情報も利用され、本書中には、火器を描いた西歐、イスラーム世界、中國、日本の十枚の興味深い圖が簡明な解説と共に掲載されている。

七 論點 論點は多岐にわたり、その全てを紹介することは、紙幅の關係上、斷念せざるを得ない。そのため、ここでは、特に興味深い論點のみを以下に列挙したい。

（一）西歐で火器が發達した理由についての諸説（科學技術優越説、常時戦争説、文化的適合説）、あるいは他の地域で西歐ほどに火器が發達しなかつた理由についての諸説（文化的嫌惡説、國家規制説）を納得できる理由を擧げて全て否定している。なお、云うまでもなく、この諸説についての全面的な否定を踏まえた上で、著者の假説、

新説が提示されるのである。

（二）一七〇〇年ころまでの初期の火器は扱いにくく、正確さにも缺けた。初期の火器は歩兵のみが扱える武器であり、騎兵が火器を馬上で扱うことはほとんど不可能であつた。このように、初期の火器は歩兵の武器として發展するのである。

（三）火器がなお未熟であつたため、初期の火器が有効であつたのは城包圍戦と密集した歩兵に對してのみであつた。それ故、初期の火器は、城も歩兵も持たぬ遊牧民に對しては有効性に乏しかつた。

（四）火器が發達した時期に、もともと戦争に歩兵が多用されていた地域は、西歐と日本である。西歐と日本では、歩兵が弓を火器に持ち代えさえすればよく、このため西歐と日本で火器の利用が急速に發達した。

（五）遊牧民の騎兵に對抗するには騎兵で立ち向かう必要があつた。しかし火器は騎兵になじまない。そのため遊牧民と常に戦つた地域では火器があまり發達しなかつた。

（六）中國で一〇〇年代前半に火器が發明された。その理由は、當時、中國國內でも戦争が絶えず、城を攻めるため有効な武器を開發する必要性があつたからである。

火器は元明交代期の南中國での戦争（河川を利用した戦、そして攻城戦）に活用された。しかし、明の成立以降、主な戦場が南中國から北中國やステップに移るにつれ、戦争の性格が変わった。明の軍隊が火器の有効でないモンゴル騎兵に主に対処したため、中國における火器の發達が遅れ、中國は十五世紀の末までに火器の面で西歐やオスマン朝に後れをとるに至った。

（七）十六世紀の初めまでに、西歐（特にポルトガル）やオスマン朝から改良された火器が中國に到着した。中國人はその優秀性に気づき、ただちにその攝取を開始した。ただし、中國人は單にヨーロッパの火器をコピーしただけでなく、新たに得られた知識を應用して従來の中國の火器を改良した。しかし、遊牧民との戦いに必要な、馬上での素早い再装填の問題はついに解決されなかった。

（八）西歐で火器が發達したのは、その地理が、火器を用いる攻城戦と火器を扱う歩兵の利用に適していたからである。

（九）海戦が、火器、特に大砲の發達に大きな意味を持った。西歐やオスマン朝における、海上での大砲の需要が大砲の革新を

促した。海戦の少ない日本では大砲は發達しなかった。

（一〇）西歐では、十七世紀、小銃の發達に伴って、軍隊の主力は銃手とそれを守る槍手とによって構成された。銃手と槍手は農民から補充できたので、軍隊の規模が急激に増大した。また西歐では、未熟な農民を軍事的に訓練する方法や制度が發達した。この軍隊の擴大と軍事訓練の普及が、十八世紀以降の西歐の戦争のスタイルを一變させ、十八、十九世紀における西歐の優越に大きく貢献した。

（一一）十七世紀後半、西歐に銃劍が登場し、槍手を不要なものとした。また火繩銃に代わって火打ち石銃が發明され、小銃の扱いが容易となった。これらの火器を巡る技術的な革新はすべて西歐で起こった。

（一二）東歐（ロシアを含む）は、西歐をステップの脅威から守る緩衝地帯となったが、東方ではステップの騎兵、西方では西歐の歩兵という両面からの攻撃に曝されたこのように一方で騎兵に對處せねばならぬこともあって、東歐は火器を西歐ほどには發達させなかった。

（一三）新大陸アメリカにおけるアズテカ、

インカ兩帝國の急速な滅亡に大きな役割を演じたのは、火器ではなく、ヨーロッパ人が持ち込んだ天然痘、はしかなどの疫病である。

（一四）トルコのオスマン朝は十五世紀半ばに、どこからか火器を導入し、常にどこかと戦っていた。この絶えざる戦争情況がオスマン朝における火器の發達を速めた。

（一五）オスマン朝は、十七世紀後半、西歐が従來の火繩銃と槍に代わって火打ち石銃と銃劍を採用して以降、衰退の兆しを見せる。しかし少なくとも火器の導入と活用によってその隆盛を築いたという點からすれば、こと火器に關する限り、オスマン朝を成功者と見なすことが出来る。

（一六）エジプトのマムルーク朝はオスマン朝より早くに火器を知りながら、それを軍事力に全面的に取り入れることができなかった。その理由は、彼らの軍隊の主力（マムルーク）が騎兵であり、また彼らが面した主な脅威がシリア邊境の遊牧民からのものであったためである。

（一七）イランのサファヴィー朝も火器を導入し、西方ではオスマン朝軍の火力と戦った。しかし、東方では遊牧民ウズベクと

戦わねばならず、この両面の敵と戦うために二つの戦争のスタイルを必要とした。そのためもあって、火器を十分に發達させることができなかった。

(一八) インドには、十五世紀半ばのアフガン時代に火器が到來し、十六世紀以降のムガル朝時代に多用されて、これらの火器がインドにおける戦争のスタイルを一變させた。ムガル朝は初期から火器を導入・活用し、その面で批判されるべき點はない。

しかし彼らには、オスマン朝のごとく、火力を活用する西歐の陸軍と戦った経験もなく、また大砲を發達させる海軍もなかった。そのため、彼らがオスマン朝ほどに火器を發達させ得なかったのはやむを得ない。

(一九) 東南アジアは、十三世紀から十五世紀の間に、中國船が搭載する火器に常に接していたので、西歐の火器の到來する以前から、すでに火器の知識を持っていた。

そのため西歐の火器がポルトガル人によって東南アジアにもたらされると、火器が急速に廣まり、この地域の戦争でマスケット銃や旋回砲が常用された。

(二〇) 朝鮮は十四世紀半ばに中國から火器を導入した。しかし、朝鮮は二世紀にわ

たって火器を日本人からは隠し通した。

(二一) 十六世紀半ばまでの朝鮮では海戦が多く、そのため船に積まれる大砲・旋回砲などの活用については経験が積まれたが、マスケット銃などについては知識が乏しかった。これが秀吉の侵略の際に、朝鮮の陸軍が日本のマスケット銃に簡単に敗北し、これとは對照的に海軍が活躍した理由である。また、日本軍によるマスケット銃の有效な活用は、日本における火器の發達を示す明白な證據である。

(二二) 十五世紀後半の應仁の亂は日本に巨大な歩兵の部隊を登場させた。歩兵の主要な武器は槍と弓であった。つまり日本には、火器の導入に先立って、すでに訓練された歩兵が存在した。そのため十六世紀半ばにひとたび日本に西歐の火器が導入されると、これらの歩兵は簡単に弓を銃に持ち代えることが出来た。かくして、日本で火器が急速に發達したのである。

(二三) 戰國時代の日本でマスケット銃の使用が急速に發展したのは、日本の地理や戦争のスタイルが西歐の戦争とよく似ていたためである。戦争は、日本でも西歐でも共に人口稠密地帯で、主に歩兵によって戦

われた。

(二四) 徳川時代の日本には、島原の亂、大鹽平八郎の亂という二つの反亂を除いて戦争はなかった。徳川時代を通じて火器は所有され製造され続けたが、戦争という危急の要が無かったので、日本における火器の發達は止まった。徳川時代、火器の利用は、軍事的な利用から狩りにおける利用へと移った。

(二五) マスケット銃手や砲手を敵から守る手段として、西歐と日本では槍手が、東歐、イスラーム世界、インド、北中國では車輛が使われた。車輛が使われたのは、遊牧民と關係を持った地域である。これらの地域で車輛が使われたのは、ステップなどで、兵站に難しさがあったためである。

(二六) 火器が普及した時代の戦争には、主に三つのスタイルがあった。第一は、西歐や日本のように、歩兵に重點を置き、火器と槍手を使う戦争である。第二は、東歐、イスラーム世界、インド、北中國のように、騎兵に比重がかかり、火器と車輛が使われた戦争である。第三はステップや砂漠の輕騎兵による戦争である。結局、その中で、西歐の歩兵と火器の組み合わせが世界を制

したのである。なお、日本でも歩兵と火器の組み合わせが発達したが、徳川幕府による統一以降、ほとんど戦争が無く、そのため火器の發達が止まったのである。

(二七) 一七〇〇年代、一八〇〇年代に西歐で火器の技術的改良が進むと、火器は扱いやすいおそるべき武器となり、遊牧民との戦いにも使用されて遊牧民を壓倒した。産業革命が連發式ライフル、機關銃などの新兵器を生み、西歐の優勢は決定的となる。ただしこれらの問題は本書の直接の対象ではない。

(二八) 西歐の優越は、西歐が軍に火器を製造するための優れた技術を發達させ、優れた火器を所有した結果ではない。その優越は西歐で火器を有効に活用するための訓練・組織が發達し、その上、火器を実際に使用する戦争の経験が長年にわたって蓄積されていたという、西歐における廣い意味での戦争技術の發達の結果である。

(二九) 著者の結論は右下の表に要約されている。

八 問題點 問題點を少しだけ挙げたい。例えば、一三一ページに、ムガル朝の開闢者バーブルはティムールを通じてチンギ

火器の發達		步兵からの注目に値する脅威？	
遊牧民からの注目に値する脅威？	有り	有り	無し
	無し		
	火器の發達Ⅱ中程度 (オスマン朝、東歐)		火器の發達Ⅱ遅い (中東、インド、中國)
	火器の發達Ⅱ速い (西歐、一六一五年以前の日本)		火器の發達Ⅱ無し (一六一五年以後の日本)

ス・ハーンの子孫であるとするが、ティムールはチンギス・ハーンの子孫ではない。また、一七〇ページや一九九ページあたりで、清のジュンガル打倒に際しての清の火器の役割をあまり評價していないが、佐藤長氏の最近の論文「中國西北諸民族の性格について(下)」(『鷹陵史學』二九號)七五ページにも、清とジュンガルの「火力の大小が勝敗を決した」と總括されているように、兩者の戦いにおける火器の役割については、なお再考の餘地がある。さらに、これに關連するが、本書で少ししか觸れられていないジュンガルなど遊牧民による火器採用の實態と利用についてもさらなる検討が望ましい。また、遊牧民との戦争で使われた車輛についていえば、五・六世紀の高車や十三世紀のモンゴルの、輓車を用い

たキュリエン(屯營)などからも分かるように、遊牧民も車輛を使用した。この車輛が遊牧民によつて戦争にどのように活用されたかについても検討が望ましい。一四三ページや二四二ページに見える、中國語「佛郎機」の語源についての新説(大砲の一種である旋回砲とポルトガルという國を示す、別々の語源を持つ二つの言葉が、中國で一つに混同され、一つの語となったという説)も、興味深い。なお検討が必要であろう。また、細かい點を挙げると、一六三ページ、明の將軍戚繼光の『練兵實紀』の記述を根據に車輛旅團の構成を説明した箇所、二名の「マスケット銃手」としているのは、原文には「二名、……火銃を管す」とあるから、「火銃手」とすべきであろう。マスケット銃手は『練兵實紀』

の同じページに「鳥銃手」として見える。ただし、廣範な地域における火器に關する情報を、膨大な文献を驅使して検討した本書にこのような些細な過誤やなお望ましい點が見られるのはむしろ當然で、これらは本書の高い價值をいささかも損なうものではない。

九 評價 眞に世界史の名に値する著書として高く評價したい。また、本書が、各地域を専攻する専門家にも、戦争や火器の問題を考える上で大いに參考になるであろうことは疑う餘地がない。有益な、興味深い書であるだけに、邦譯されて日本の多くの讀者に讀まれることが望ましい。文章は明快である。ただし、言葉に對する鋭敏な感覺を持つ著者が本書の中で時に使用した周到な言い回しを的確に邦譯するには、かなりの英語力が必要かとも思われる。

なお、著者は本書の冒頭に、ルネサンス期イタリアの詩人アリオストの傑作『狂えるオルランド』（一五一六年）から「おお、邪にして、うとましき發明よ、いかにして汝は人の心に宿りしぞ」（協功譯を一部變更）という一節を掲げている。「邪にして、うとましき發明」が火器を指すことは云う

までもない。著者がある思いを込めて、火器を扱った本書の冒頭にこの一節を引用したことは明白である。才能に富む著者の第二作に期待するところ大なるものがある。

Cambridge, Cambridge University Press, 2003.
xvii + 290 pp.

丁文江・趙豐田編、島田虔次編譯

『梁啓超年譜長編』

岡 本 隆 司

年譜という傳記形式は、史書の編年體に對應する、すぐれて中國的なものである。個人の文章をあつめた別集には、編者が自他の參考用に添附收録する例が少なくないし、譜主みずから編む自訂年譜もある。もちろん後代あるいは現代に、新たに編集することも多い。いずれの場合にしても、多かれ少なかれ歴史上の人物の事績が、詳細にわかる履歷書として、便利な工具書、史料となりうる。年譜長編とは、ごく簡単にいえば、そうした年譜の記述がもとづく資

料を年次順に並べたものである。史料の原貌がそのまま残るため、年譜そのものよりも價值が高いとして、歴史家には尊重される。

その資料も譜主の經歷によつて千差萬別だが、公人なら普通は、公的に残した文章を使う。梁啓超という人物は周知のように中國傳統學術の十分な素養のうえに、西洋の新しい學問の攝取につとめた學者、思想家であり、かつ二十代から政治活動家、ジャーナリスト、閣僚、教育家など、いまの職業的範疇では到底くりきれない廣汎な活動をして、ある意味で、中國の近代をつくった、とさえいえる巨人である。當然それが發表した文章も多方面にわたつて、膨大な量にのぼる。ところが『梁啓超年譜長編』は、通例の年譜編纂とは異なり、そうした文章を必ずしも中核の資料とはしない。梁啓超が家族、師友とやりとりした大量の私信を主たる材料につくつたものである。

梁啓超が歴史上はたした役割の大きさ、そしてその私信が久しく閲覽できなかった情況を考えれば、『梁啓超年譜長編』が二次史料、工具書にすぎない類書とは比較を